子ども用一般主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討

神 田 信 彦¹

A STUDY ON RELIABILITY AND VALIDITY OF A SCALE MEASURING THE GENERAL PERCEIVED CONTROL FOR CHILDREN

Nobuhiko KANDA

The present study describes the reliability and the validity evidence concerning a measure of a generalized perceived control for children (GPCC). A four points scale questionnaire consisting of 40 items was administrated to 353 Japanese primary and junior high school children. Construction procedures leading to the final 26-item scale were described. Score on the GPCC scale showed high internal consistency ($\alpha = .78$) and a high test-retest reliability ($r = .88$). The validity of the GPCC scale was conformed to the following results: 1) Correlation between the GPCC scale and the CNS-IE (Nowicki, & Strickland, 1973) was -0.48 ($p < 0.001$). 2) Compared to children with high-perceived control, children with low one showed more maladjustment symptoms, such as a stronger desire and inclination to not attending school, all proving a feeling of interpersonal maladjustment. 3) In the case of a controlled IQSS, the significant relationship between the GPCC and academic achievement with primary school children was partially proved.

Key word: perceived control, maladjustment, non-attendance at school, interpersonal maladjustment, academic achievement.

問 題

人の主観的統制感を扱う概念には、特定の行動領域に関する特定期待に由来するものと、個々の領域ではなく自己の行動のすべてに関わる一般期待がある。Rotter (1966) は、後者に関して Locus of control (以下 LOC) 概念を提唱した。Rotter によれば、LOC は人の過去の経験によって形成されるもので、内的統制への期待と外的統制への期待を両極とする 1 次元の連続体である。内的統制への期待は、自分自身の行動がある成果や結果をもたらすという期待を指し、外的統制への期待は、結果の生起に関して自分の行動以外の外的な力（例えば運・不運や有力な他者など）が結果の生起を左右するという期待を指している。

Rotter は LOC が行動の予測力を最も発揮するのは、当該の事態がこれまで経験したことのない新奇なものであるか、曖昧である場合であるとしている。しかし、その後の成人を対象とした研究の多くは、LOC はそうした事態ばかりでなく、適応性や情報探索などとの関係も明らかにされてきている（水口, 1985 参照）。

本研究では、一般期待としての主観的統制感を扱い、子どもの主観的統制感について検討する。子どもの主観的統制感に関しても成人についてと同様に多くの研究がなされているが、以下に挙げる問題点を指摘できる。

第 1 に、子どもの主観的統制感を測定するための尺度に関する問題がある。

子ども用尺度としては、Bialer (1961) の Bialer's Locus of Control Scale, Nowicki & Strickland (1973) の Children's Nowicki & Strickland Internal-Exter-

¹ 立教大学 (Rikkyo University)

nal Control Scale (CNS-IE) や Crandall, Katkovski, & Crandall (1965) の The Intellectual Achievement Responsibility (IAR) がこれまでよく使用されているが、次のような問題点がある。

Bialer の尺度については、信頼性に難点があることや反応にバイアスがかかりやすい項目が含まれている (Nowicki & Strickland, 1973) という指摘が行われている。IAR については、構成項目が専ら学業達成場面に限られており、一般的期待としての主観的統制感を測定するものとは言い難い。また、Nowicki & Strickland (1973) は強制選択方式によって回答を求めることは、年少の児童や精神遅滞児に対しては困難であると指摘している。

CNS-IE に関しては、主観的統制感を問う内容というよりは、むしろ行動によって得られる成果の持つその本人にとっての重要性、つまり強化価値を問う項目が含まれているといった問題がある。強化価値も含めて行動を予測するとすれば、その予測力は当然向上すると考えられるが、尺度にこうした項目を含めることは主観的統制感の概念的独立性が保てなくなるという難点がある。

本邦における子ども用尺度としては、樋口・鎌原・清水 (1978) の作成した児童用尺度と、菅野 (1989) の児童・生徒用尺度などがある。

前者は、小学生のみを対象として尺度が作成されていると考えられる。また、項目の中に、例えば、“あなたが小鳥を飼っていて、小鳥が逃げてしまったとしたら、それはあなたがいじめたからだだと思いますか”などのように不自然であったり、極めて限定された状況の項目が散見される。また、原因帰属的な設問と期待を問う設問の混用もみられる。特に、原因帰属的な設問の仕方の問題となるのは、この背景に帰属＝期待といった関係を想定していると考えられることである。例えば、何らかの課題に失敗した個人が、その原因を自分の能力不足に原因を帰属したとすれば、その後の主観的統制感に対する期待は高まるのであろうか。この場合は、主観的統制感は低下すると予想するのが妥当であろう。したがって、取り合えずは、帰属＝期待といった関係は留保すべきであり、帰属スタイルを問う形式は避けるべきである。その点を考慮したと思われるが、鎌原・樋口・清水 (1982) は、成人用の Locus of control 尺度を期待を問う形式で作成している。

菅野の尺度については尺度作成にあたってのサンプル数が小学生57名(男子33名、女子24名)、中学生92名(男子46名、女子46名)と少ないことによる信頼性の問題

や、妥当性の吟味が行われていないといった問題点が指摘できる。

また桜井 (1986) は Connell (1985) の多次元的主観的統制感尺度の日本語版である領域別三次元統制感尺度を作成している。この尺度は主観的統制感が、internal, powerful others および unknown の三次元で構成されるとの仮定にたち、さらに、学習、友人、運動および一般の4領域について得点を算出するように尺度構成されている。この尺度は樋口らの尺度と同様に原因帰属を求める設問の混在が見られる。また、領域ごとに得点を算出する尺度であるため LOC 的な視点の主観的統制感とは性格を異にするものであると考えられる。主観的統制感の多次元性に関しては、例えば、単次元尺度と比較して行動の予測力が勝るものであるのかどうかを示されておらず、必ずしも尺度が多次元でなければならないという証査もない。さらに領域別主観的統制感尺度は、専ら領域ごとの主観的統制感を扱う尺度であり、一般的期待としての主観的統制感とは言い難い点もある。

第2に、子どもの主観的統制感に関しては、加齢に伴うその発達の変化に関する研究 (Nowicki, & Strickland, 1973, Sherman, 1984 など)、親の養育態度との関係 (Katkovsky, Crandall, & Good, 1967; Crandall, & Crandall, 1983 など) 文化差との関係 (Battle, & Rotter, 1963; Milgram, 1971 など) や達成行動との関係 (Brown 1980; Sherman & Hoffman, 1980 など) が多く研究されているが、不登校をはじめとする不適応感や不適応行動との関係についてはほとんど検討されていない。子どもの主観的統制感をさらに理解するためには、こうした現実的な問題に焦点をあて、その関係を吟味することが有効であり、そのことにより教育的、あるいは臨床的な示唆が得られると考えられる。

主観的統制感と不適応の関係については、何らかの困難な事態に直面した時、主観的統制感が低い人は、客観的には効果的に対処できる能力や手段を持っているにもかかわらず、結果をコントロールできないと期待しているために効果的な対処行動を起こしにくいと考えられる。したがって、不適応感や不適応行動に陥りやすいと考えられる。そのことがさらに主観的統制感を低くするという悪循環をもたらすものと考えられる。

また、学業上の不適応に関しても主観的統制感が低い人は自分の行為が所与の成果をもたらさないと期待するため、知能などの他の条件が等しければ、主観的統制感が高い場合よりも目標遂行行動が生起されにく

く、実際には潜在的な能力は備えていたとしても、遂行結果の不振を伴うものと考えられる。達成行動の視点から換言すれば、主観的統制感の高い場合は、目標遂行行動が生じやすく学業成績もよいと考えられる。つまり、主観的統制感が高ければ、学業成績もよく、主観的統制感が低ければ、学業成績も低いというポジティブな関係が予測される。主観的統制感と学業成績との関係については、Brown (1980) や Sherman & Hoffman (1980) などそれを確認した研究は多いが、ほとんどが大学生など青年期以後の人々を対象としており、年少者に関しては十分な検討が行われているとは言いがたい。

このように考えると、児童・生徒の主観的統制感に関するこれまでの研究の問題点は、①尺度構成の問題（項目内容の適切さの問題、回答の形式に関する問題、次元性の問題や信頼性・妥当性の検証の問題など）、②教育や臨床的視点に立つ研究の不足が指摘される。そこで、本研究では、上述の観点から改めて小学生・中学生を対象とする子ども用一般主観的統制感尺度（以下、子ども用主観的統制感尺度）を構成する項目を選定し、信頼性、妥当性を検討する。

妥当性の検討に当たっては、一般的期待としての主観的統制感と不適応との関係および、学業成績との関係を扱う。

研究 I

目的

主観的統制感が高 Internal（低 External）—低 Internal（高 External）を両極とする一次元連続体であるとの仮定にたち、菅野 (1989) の項目を基に新たに項目を追加、尺度を作成し、信頼性、妥当性を検討する。

方法

被調査者 調査1：子ども用主観的統制感尺度の標準化のための被調査者は東京都の公立小学校の児童155名（男子83名、女子72名）、公立中学校の生徒198名（男子98名、女子100名）、合計353名を対象に行った。また、再検査信頼性を検討するため東京都内の学習塾の生徒30名も対象となった。

調査2：調査1を対象に作成された尺度の信頼性と妥当性を再吟味するために、千葉県内の公立小学校の児童350名（男子196名、女子154名）、公立中学校の生徒307名（男子154名、女子153名）、合計657名を対象として調査を行った。

手続：“生活についての意見”を調査するという名目で調査を実施した。調査は、調査1・2共に各学校の

授業時間中に各クラスの担任教師が実施した。

質問紙の構成：被調査者の学年、年齢、性別などの基本的属性を問うフェイス・シートの部分と調査1については、菅野 (1989) の作成した尺度35項目に新たに追加した5項目を合わせ計40項目（1回目）、邦訳版 CNS-IE40項目およびその他数項目を加え構成された（2回目）、調査2については、調査1の質問紙のうち CNS-IE の項目を除いた項目で構成された。回答は4件法（CNS-IE については、2件法）で求めた。

調査の実施期間：調査1については、1989年9月下旬～10月下旬（1回目と2回目の調査は最低1週間の間隔をおいて実施するように求めた）。調査2については、1991年9月上旬にそれぞれ実施した。

結果と考察

項目の選択：主観的統制感を示すと考えられた40項目について主成分分析を行い、第1主成分の固有ベクトルの成分が、.30以上の21項目を選定した。さらに、小学生・中学生ごとに同様の分析を行い、21項目とは別に固有ベクトルの成分が、.30以上の項目を5項目追加し、計26項目を選択した（TABLE 1）。

信頼性と妥当性の検討：26項目について内的整合性の検討を行うために合計得点（可能な得点の範囲は26～104点で高得点であるほど主観的統制感が高い、すなわち内的統制への期待が高いことを示す）の上位23.0%（81名、得点の範囲82～98点）を上位群、下位25.9%（91名、得点の範囲48～69点）を下位群とし、各項目についてt検定を行った。その結果、26項目すべてに有意差（ $p<.01$ ）が検出された。

さらに、Cronbach の α 係数を求めたところ、.78（小学生のみでは、.75、中学生のみでは、.77）であった。また、4週間をおいての再検査信頼性は、.89（ $p<.01$ ）であった。

調査2のデータに関しても上位24.0%（176名、得点の範囲79～100点）—下位24.0%（161名、得点の範囲40～65）検定ですべての項目で有意差（ $p<.01$ ）が検出された。さらに α 係数は、.78であった。鎌原らの尺度では、45項目で構成されており、 α 係数は、.74である。また菅野の選定した項目の α 係数は、.74である。通常、信頼性係数は、.80以上あることが望ましいとされているが、本尺度はその値を若干下まわっている。しかし、既存の尺度より少ない項目数で高い値を実現していること、さらに他の尺度や調査項目と併用して小学生に実施する場合を考慮すると、項目の数を増やし α 係数を高めるまでもないと考えられる。したがって、 α 係数及び再検査信頼性両方の検討から本尺度は、今後の検討に十分な信頼性を有すると言えよう。

また、CNS-IE（external 得点を算出）とのピアソンの

積率相関係数は、 $-.48$ ($p<.001$) とかなり高い相関が存在した。このことは選定された項目で構成される本尺度の併存的妥当性を示すものと言える。

性差と小学生・中学生の差：子ども用主観的統制感尺度の平均得点を性別×学年別で示したものが、

TABLE 2 である。主観的統制尺度を従属変数に性別と小学生・中学生の別を説明変数とした分散分析を行ったところ、小学生・中学生の別の主効果だけが有意であった。小学生より中学生の方が、つまり年齢の上昇と共に主観的統制感が低くなることが示された。

TABLE 1 項目分析の結果

項 目	主成分分析の	
	第1主成分の 固有ベクトル ^{a)}	項目一得点 の相関係数
他の人がどんなことをしようと自分には関係ない ^{a)}	.53	.36
自分は何をやっても、だめな人間だと思う ^{a)}	.53	.45
自分が努力すれば、少しぐらいクラスをよくすることができると思う	.52	.39
みんなから悪いことに誘われても、断る勇気がある	.48	.38
みんなから反対されても、言うべきことは言い通す自信がある	.47	.39
クラスでじゃまものにされていると思うことがある ^{a)}	.47	.37
むずかしいことやめんどろなことは、すぐにあきらめてしまう方だ ^{a)}	.44	.38
学校でまじめにやっていると、いつかはよいことがある。	.43	.33
知り合いに有名人がいないと出世するのはむずかしい ^{a)}	.41	.35
むずかしいことにぶつかった時には、なりゆきにまかせた方がうまくいく ^{a)}	.41	.32
ともだちからよく相談をうけ頼りにされていると思う	.40	.30
自分でもがんばれば、社会に役立つ人間になれると思う	.37	.29
学校では先生たちに何か言いたいと思ってもあまり言えない ^{a)}	.38	.28
いろいろ先のことまで考えて計画を立てるのが好きである	.37	.28
勉強のできる人は、生まれた時からできるように決まっている ^{a)}	.36	.28
友達ができて長続きしない ^{a)}	.35	.29
めずらしいものにとびつくのも早い、あきるのも早い ^{a)}	.34	.25
一所懸命やっていれば、まわりの人が味方になってくれると思う	.34	.22
自分ではたいへんことは人なみにできると思う	.34	.28
悪いことをすれば、バチがあたると思う	.34	.23
よい学校に合格できるかどうかは、実力よりもその時の運で決まると思う ^{a)}	.31	.23
自分にも他の人より優れてる点はあると思う	.30	.22
将来の成功のために苦労するよりも、今を楽しく過ごした方がよい ^{a)}	.29	.17
欲しいものがあつたら、すぐ買ってしまわないと気がすまない ^{a)}	.28	.25
自分が努力すれば、いい友達ができると思う ^{a)}	.27	.20
自分はいつもだれかに指図されていないと、なまけてしまうおそれがある ^{a)}	.26	.21

^{a)}逆転項目を示す。^{b)}第1主成分の固有権は、4.57、寄与率は、17.4%。

TABLE 2 性別、小学生・中学生別の子ども用主観的統制感尺度得点

	男 子			女 子			全 体		
	n	平均	SD	n	平均	SD	n	平均	SD
小学生	83	77.06	8.32	72	78.89	8.88	155	78.04	9.01
中学生	98	72.33	7.84	100	73.55	8.01	198	72.93	9.58
全 体	181	74.31	8.05	172	76.03	8.20	353	75.19	9.33

この結果は、従来の米国などの研究結果 (Nowicki & Strickland, 1973,他) とは矛盾するが、国内の研究の結果 (鎌原・樋口, 1987; 森, 1990) とは一致する。加齢に伴う主観的統制感の発達の変化については、これまで主に2つの考え方が主張されている (Weisz & Stipek, 1982; 神田, 1991 参照)。1つは、主観的統制感が次第に上昇するという立場で、子どもは発達とともに自分の実際の能力や独自に行える事が多くなることを次第に認めるようになる。これは結果的に主観的統制感を強めて行

くことになるものである (Lefcourt, 1976; Brim, 1974; Nowicki, & Strickland, 1973)。もうひとつの立場は、年齢の上昇とともに主観的統制感は低くなるという立場である。Piaget (1930) や Piaget と Inhelder (1975) は、幼児はある事象に影響を与える自己の価値を過剰に評価しているが、年齢の上昇とともに是正されるようになるとしている。この考え方を主観的統制感に適用するとこの第2の立場が主張されるわけである。

上述のように、米国などでは子どもの年齢の上昇に伴い主観的統制感は上昇するという結果が得られ、前者の立場を指示する研究が多いが、本研究も含めた日本の子どもたちの結果は、反対の傾向を支持している。このことは、子どもの主観的統制感の発達の変化は、普遍的な傾向を示すというよりも文化や社会的状況によって異なるという可能性を示唆していると言える。今後、このことを明確にする研究が求められよう。

研究 II

目的

中学生を対象に、その不適応感や不適応行動が主観的統制感とどのような関係にあるのかを検討する。前述のことから仮説は以下のとおりである。

1. 不適応感を抱いている個人の主観的統制感は、不適応感を抱いていない個人のそれに比べ低いであろう。
2. 不適応行動を起こす個人の主観的統制感は、そうでない個人の主観的統制感得点より低いであろう。

中学生が示す不適応感や不適応行動は多岐にわたるが、本研究では、交友関係と不登校にかかわる意識と行動を取り上げる。

方法

被調査者：研究 I の調査 2 の被調査者のうち中学生 307 名 (男子 154 名, 女子 153 名)。

質問紙の構成 フェイス・シートとしての性別、年齢、学年などの基本的属性と“生活についての意見”の名目で、研究 I で使用した 40 項目及び、不適応感、不適応行動をたずねる 4 項目などで構成された。不適応感の指標とする項目は以下のとおりである。

- ①不登校欲求：「学校を休みたいと思うことがよくある」
- ②不登校行動：「病気やけが以外で、学校を休みたいと思った時、本当に休んでしまうことがある」
- ③対人不適応感 A：「友だちといるより、一人でいる方が気が楽だ」

④対人不適応感 B：「友だちとどう付き合ったらよいか分からない」

①, ③および④は、4 件法で回答を求めたが、②だけは、「よくある」、「ときどきある」、「ない」の 3 件法で回答を求めた。

調査の実施時期：1991 年 9 月上旬。

結果と考察

不適応感を表わす各項目とも、選択肢への反応ごとにグループ化 (子ども用主観的統制感尺度得点に性差は見られなかったので全体をグループ分け) して分析を進めた。

各不適応項目の選択肢ごとの主観的統制感の平均得点は、TABLE 3 の通りである。いずれも問われた内容へ否定的に反応する (不適応でない) グループほど主観的統制感が高い傾向が見られる。それぞれについて主観的統制感得点を従属変数とし、選択肢によるグループを説明変数とする 1 要因の分散分析を行った。不登校欲求 ($F=15.35, df=3, p<.001$), 不登校行動 ($F=15.38, df=2, p<.001$) 対人不適応感 A ($F=3.72, df=3, p<.012$), 対人不適応感 B ($F=6.28, df=3, p<.0004$) のいずれも有意な結果を得た。また Tukey 法による多重比較 (有意水準.05) の結果は TABLE 3 に示した通りである。

TABLE 3 不適応の程度と主観的統制感の平均得点と多重比較の結果

		平均	SD	人数	①	②	③
不登校欲求	①そう思う	65.81	9.35	69	①		
	②少しそう思う	69.60	8.41	86	②	*	
	③あまり思わない	72.53	9.38	80	③	*	
	④そう思わない	75.50	8.96	71	④	*	*
不登校行動	①よくある	63.10	8.58	19	①		
	②時々ある	68.20	8.47	95	②	*	
	③ない	72.90	9.61	192	③	*	*
対人不適応感 A	①そう思う	67.30	9.54	43	①		
	②少しそう思う	69.86	6.37	50	②		
	③あまり思わない	70.77	9.09	106	③		
	④そう思わない	72.82	10.97	107	④	*	*
対人不適応感 B	①そう思う	66.90	10.69	30	①		
	②少しそう思う	68.56	8.40	62	②		
	③あまり思わない	70.67	8.99	112	③		
	④そう思わない	73.76	9.62	101	④	*	*
全体		70.85	9.62	306			

表中の*印は、多重比較で有意差 (0.05) のあったものを示している。

また、不適応各項目への反応に対して不適応感が強くなる程、数字が大きくなるように 1 から 4 (不登校行

動は1から3)までの得点を与え、子ども用主観的統制感尺度との間の相関係数を算出した。対人不適応感Aは、有意ではあるがかなり低い負の相関 ($r=-.19, p<.0007$) が、対人不適応感B ($r=-.25, p<.0001$)、不登校欲求 ($r=-.36, p<.0001$)、と不登校行動 ($r=-.30, p<.0001$) は、有意な低い相関が得られた。さらに、これらの項目の得点を合計した不適応の総得点と主観的統制感との間には、有意な比較的高い相関 ($r=-.42, p<.0001$) が得られた。

不適応について意識レベルや自己報告に基づく指標を基に主観的統制感との関係を吟味したが、いずれも不適応感や不適応行動が強い場合の方が主観的統制感が低いという結果が得られた。主観的統制感が低いから不適応感を抱くのか、不適応感を抱くから主観的統制感が低くなるのか、あるいは、循環的であるのかは、本研究では明らかにすることはできないが、主観的統制感と不適応感との間に強い関係が存在することが明らかとなった。こうした結果は、予想した主観的統制感と不適応の関係を支持するものであり、本尺度の構成概念的妥当性も保証されと言える。

また、この結果は子どもたちの不適応行動に取り組むにあたって、単に当該の問題だけに焦点を絞って援助や指導を考えるだけでなく、その子どもの生活全般にわたって指導し、主観的統制感を高めることで自分の行動が効果的であるという期待を高め、適応感や適応的な行動をもたらしことへの可能性を示唆するものと考えられる。

研究 III

目 的

研究 I で精緻化された子ども用主観的統制感尺度を用いて主観的統制感と学業成績の関係を吟味し、併せて、子ども用主観的統制感尺度の妥当性の検討を行う。仮説は以下の通りである。

主観的統制感と学業成績の間にはポジティブな関係があり、この関係は知能の影響を排除しても存在する(言い換えれば、知能段階が同水準であるにもかかわらず、成績に差が存在する場合、成績の高い者は、低い者よりも主観的統制感が高いと言える)。

方 法

対象：研究 I の調査 1 の被調査者のうち公立小学校の4年生～6年生の児童152名(男子71名、女子81名)。

分析測定：分析の対象になったのは以下のものである。

①子ども用主観的統制感尺度。

②1989年度1学期の算数と国語の成績(それぞれ3段

階評価でAを3、Bを2そしてCを1として分析)。

③1989年度1学期に測定された知能偏差値(田研式新制田中B式知能検査第1形式)。これにより知能段階を1(～34)、2(35～44)、3(45～54)、4(55～64)および5(65～)の5段階に分ける。

調査の実施時期：1989年9月。

結果と考察

国語と算数の成績それぞれと子ども用主観的統制感尺度との間の相関係数を全体及び知能段階ごとに算出したところ、全体と知能段階2、3と5で両教科とも有意な相関を得た。また、主観的統制感と知能偏差の間には有意な弱い相関($r=.28, p<.001$)が存在するため、知能の影響を排除した偏相関係数を算出した結果が、TABLE 4 に示されている。全体と知能段階3では、弱い有意な関係が、知能段階2と5では、かなり高い関数が得られた。

TABLE 4 知能偏差をコントロールした時の主観的統制感尺度と各成績との偏相関係数

知能段階	算 数	国 語
1 (～34) n=7	-0.23 p<0.24	-0.58 p<0.33
2 (35～44) n=18	0.40 p<0.50	0.43 p<0.44
3 (45～54) n=54	0.29 p<0.001	0.40 p<0.02
4 (55～64) n=61	0.13 p<0.18	0.14 p<0.15
5 (65～) n=14	0.62 p<0.02	0.69 p<0.01
全 体 n=154	0.24 p<0.001	0.31 p<0.001

しかし、両教科の成績が3段階評価のため、偏相関係数の算出結果が、必ずしも最善であるとは言えない点もある。そのため、主観的統制感尺度得点を従属変数とし、成績、学年及び性別を独立変数に知能偏差を共変量とする共分散分析を両教科について行った。結果は両教科とも成績の段階の主効果だけが有意となった(算数 $df=2, F=5.41, p<.006$; 国語 $df=2, F=9.3, p<.001$)。

さらに、算数と国語それぞれについて成績別による知能段階ごとの主観的統制感得点の平均を示したものが、TABLE 5、6 である。これらについて知能別各知能段階別に子ども用主観的統制感尺度を従属変数とした1要因3水準の分散分析を行った(知能段階1はサンプル数が少ないので除外し、知能段階4はAB間の分析だけとした)。その結果、知能段階2と3で有意な結果を得た。これ

らについて Tukey 法 (有意水準=.05) による多重比較を行ったところ、国語は知能段階 2 は C, B 間に、知能段階 3 では、A, C 間, A, B 間に、算数に関しては、知能段階 2 は B, C 間に知能段階 3 では A, C 間に各成績間に有意な差がみられた。

TABLE 5 算数の成績別による知能段階ごとの主観的統制感の平均得点

知能段階		成 績 段 階			
		C	B	A	計
知能段階 1	平均得点	74.00	67.00	81.00	73.00
	S D	16.75	7.07	—	13.11
	n	4	2	1	7
知能段階 2	平均得点	71.30	78.25	—	74.39
	S D	6.90	8.28	—	8.13
	n	10	8	—	18
知能段階 3	平均得点	72.00	78.32	80.37	77.22
	S D	9.78	7.83	6.28	8.47
	n	12	34	8	54
知能段階 4	平均得点	78.00	79.35	81.80	80.28
	S D	4.97	8.74	9.23	8.67
	n	4	31	25	60
知能段階 5	平均得点	—	77.60	79.86	78.92
	S D	—	5.12	9.40	7.69
	n	—	5	7	12
全 体	平均得点	72.83	78.39	81.17	78.04
	S D	9.36	8.15	8.49	8.90
	n	30	80	41	151

TABLE 6 国語の成績別による知能段階ごとの主観的統制感の平均得点

知能段階		成 績 段 階			
		C	B	A	計
知能段階 1	平均得点	71.60	—	76.50	73.00
	S D	5.46	—	6.36	13.15
	n	5	—	2	7
知能段階 2	平均得点	70.90	78.75	—	74.39
	S D	7.06	7.55	—	8.13
	n	10	8	—	18
知能段階 3	平均得点	70.00	78.69	82.83	77.22
	S D	8.85	6.78	9.37	8.47
	n	12	36	6	54
知能段階 4	平均得点	74.75	79.35	81.83	80.28
	S D	3.86	7.99	9.57	8.67
	n	4	26	30	61
知能段階 5	平均得点	78.00	80.50	77.20	78.92
	S D	0.00	9.77	5.97	7.69
	n	1	6	5	12
全 体	平均得点	71.38	79.07	81.19	78.04
	S D	8.85	7.39	9.04	8.90
	n	32	76	43	151

これらの分析から、知能段階が普通かやや低いレベルの場合には、成績と主観的統制感との間にポジティブな関係があると言え、部分的に仮説は支持された言えよう。従って、これらの知能段階に関しては、自分の行動が効果的であるという期待が強いこと、つまり主観的統制感が高いということは、学業への積極的な態度を招来し、結果的に成績の向上をもたらすことにつながる重要な要因の 1 つとなると考えられる。しかし、知能段階が 1, 2 や 5 に関しては、仮説は検証されなかった。従って、知能段階 3, 4 に属する子どもたちのものも含む多くのデータを蓄積し、主観的統制感と学業成績との関係をさらに吟味することが必要である。

全体的考察

本研究で精緻化を行った 26 項目からなる子ども用主観的統制感尺度は、信頼に足る内の一貫性、再テスト信頼性があることが示された。さらに、構成概念的妥当性を検討するために不適応感との関係と学業成績との関係を吟味した。前者については、専ら意識レベルについての分析であったが、主観的統制感の高低と適応感、不適応感とに対応関係があることが示された。後者についても全体的な分析と、知能段階別では普通段階とやや低い段階において仮説が支持された。

これらのことから、研究 I で構成された 26 項目からなる子ども用一般主観的統制感尺度は構成概念的妥当性を有していると考えられる。

ところで、本研究で扱っている主観的統制感は、一般期待としてのそれである。Rotter によれば、LOC は一般期待を表わし、行動生起の予測力を最も発揮するのは、新奇な事態あるいは状況が曖昧な事態であるとしている。特定の領域の行動であれば、その領域に関する特定期待の方が当然予測力が高まるはずである。したがって、多くが学業達成場面に関する項目で構成されている IAR と学業成績が高い相関を示すのは、当然であるとも言えよう。しかし、本研究の子ども用主観的統制感尺度のような一般的な期待としての主観的統制感が、学業成績や (不) 適応行動などの特定領域の行動との関係が示されるとすれば、主観的統制感の考え方は、さまざまな領域の行動の予測や診断に効果を発揮すると考えられる。その意味で本研究で精緻化された子ども用主観的統制感尺度と不適応感、不適応行動や学業成績の間に有意な関係が確認されたことは、示唆に富むと言えよう。

不登校への欲求を抱いている者は、自己の生活事態

全般に対する主観的な統制不可能期待をもっており、生活上の問題のうち客観的には効果的な対処行動が可能であるものについても自ら行動を起こすことなく、自己無能感や不適応感を高め同時に主観的統制感も弱めて行くことになると予測される。主観的統制感の視点からは不登校欲求やその他の不適応は、当該の問題に焦点をあてて適応状態回復への援助や治療を目指すことよりも、その子どもの生活全般を視野に入れ主観的統制感を高めるための治療的援助を行うことが期待される。不登校の子どもたちに宿泊訓練でさまざまな体験をさせ、不登校から回復を図ろうとする試みが多くなされるようになってきているが、この回復過程も主観的統制感の回復過程と見なすことができよう。

また学業成績と関係については、断定的な言い方はできないものの、主観的統制感の高い者はそうでない者よりも学業成績がよいという結果が引き出されたわけである。このことはオーバー・アチーバーやアンダー・アチーバーを説明する変数の1つとして主観的統制感を導入することが有効であることを示していると言えよう。子どもたちの多くは、直接的か間接的かの別はともかくとして教師から「やれば、もっとできる」と言われ励まされることがしばしばあるが、多くは教師のそうした激励も効果的でないことが多いようである。つまりそうした形で子どもたちの学習意欲や学業成績を向上させることは困難である。主観的統制感の視点からは、不適応と同様に学業のことだけでなく、それとは直接関係ないさまざまなレベルの行動について自己の行動とポジティブな結果の関係性を経験させ主観的統制感の獲得を図るようにすることが期待されよう。

このように考えると、近年、子どもたちの問題として注目されている不登校や無気力の問題を捉えるにあたり、主観的統制感とは、単に問題のメカニズムの説明を可能にするばかりでなく、それらの問題の予防や治療についても有力な示唆を提供すると考えられる。さらに、一般期待としての主観的統制感を高めることは、当該の問題からの回復ばかりでなく、その後直面するであろう様々な新たな問題に対する積極的な対処行動の発現や積極的な行動様式をもたらしことが期待される。

しかしながら、主観的統制感については未だに概念的な混乱が存在している。先に指摘したような主観的統制感が単次元であるのか多次元であるかという問題や帰属との関係などである。また、LOCに限定してみると、LOCはRotter(1954)の社会的学習理論の行動予

測式の変数の1つであり、当然他の変数との関係を考慮しながら検討されるべきものである。したがって、主観的統制感とどのような変数を関係づけて行動予測を行うことが望ましいのかということも今後の課題の1つであろう。

引用文献

- Battle, E.S. & Rotter, J.B. 1963 Children's feelings of personal control as related to social class and ethnic group. *Journal of Personality*, **31**, 482—490.
- Bialer, J. 1961 Conceptualization of success and failure in mental retarded and normal children. *Journal of Psychology*, **29**, 303—320.
- Brim, o., Jr. 1974 The sence of personal control over one's life. Paper presentation at the annual meetings of the American Psychology Association, New Orleans.
- Brown, R.T. 1980 Locus of control and its relationship to intelligence and achiecement. *Psychological Reports*, **46**, 1249—1250.
- Crandall, V.C. & Crandall, J.V. 1983 Maternal and childhood behaviors and atecedent of internal—external control perception in young adulthood. In Lefcourt H.M. (Ed.), *Research with the Locus of control construct*, vol.2, Development and social problems, New York : Academic Press, Inc., pp.53—103.
- Crandall, V.C., Kathkovsky, W., & Crandall, J.V. 1965 Children's belief in their own control of reinforcements in intellectual—academic achievement situations. *Child Development*, **36**, 1—109.
- Conell, J.P. 1985 A new multidimensional mesure of children's perception of control. *Child Development*, **56**, 1018—1041.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・清水直治 1978 児童用 Locus of control 尺度の検討 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 409.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・清水直治 1981 Locus of control に関する文献的研究 東京工業大学人文論叢, **5**, 95—132.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of control 尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302—307.

- 鎌原雅彦・樋口一辰 1987 Locus of control の年齢的变化に関する研究 教育心理学研究, 35, 177—183.
- 神田信彦 1990 子どもの Locus of control に関する研究の動向(1) 立教大学心理学科研究年報, 33, 21—31.
- 菅野裕子 1989 Locus of control にいての発達の研究 1988 年度立教大学心理学科卒業論文 (未公開)
- Katkovsky, W., Crandall, V.C., & Good, S. 1967 Parental antecedents of children's Beliefs in internal—external control of reinforcements in intellectual achievement situations. *Child Development*, 38, 765—776.
- Lefcourt, J. 1976 Locus of control : *Current trends in theory and research*. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Eelbaum Associates.
- Milgram, N. 1971 Locus of control in Negro and White children at four age levels. *Psychological Reports*, 29, 459—465.
- 水口禮治 1985 人格構造の認知心理学研究—Locus of Control (統制の所在性) に属する疏—密性仮説の検証— 風間書房
- 森美奈子 1990 小・中学生の社会的認知に関する研究 1989 年度立教大学卒業論文 (未公開)
- Nowicki, S., & Strickland, B. 1973 Lucus of control for children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 148—154.
- Piaget, J. 1930 *The child's conception of physical causality*. London : Routledge & Kegan Paul.
- Piaget, J., Inhelder, B. 1975 *The origin of the idea of chance in children*. New York : Norton.
- Rotter, J.B. 1954 *Social learning and clinical psychology*. Englewood cliffs, New Jersey : Prentice—Hall.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1—28.
- Rotter, J.B. 1982 *The Development and application of social learning theory : selected paper*. New York : Praeger.
- 桜井茂男 1986 領域別三次元統制感尺度の検討 教育心理学研究, 34, 267—273.
- Schulz, R. 1980 Aging and Control. In Seligman, M.E.P. and Garber, J. (Eds.), *Human helplessness : Theory and application*. New York : Academic Press, Inc., pp.261—277.
- Sherman, L.W. 1984 Development of children's perception of internal locus of control : A cross—sectional and longitudinal analysis. *Journal of Personality*, 52, 339—354.
- Sherman, L.W., & Hoffman, R.J. 1980 Achievement as a momentary event as a continuing state and Locus of control. *Perceptual and Motor Skills*, 51, 1159—1166.
- Weisz, J.R. & Stipek, D.J. 1982 Competence, Contingency, and the Development of Perceived Control. *Human Development*, 25, 250—281.

謝 辞

本論文を作成するに当たり、ご指導及びご助言をいただいた立教大学教授 水口禮治先生、また、ご助言をいただいた同大学教授 石井巖先生、早稲田大学教授 坂野雄二先生に深く感謝申し上げます。

また、本研究のためにご協力いただいた各学校の児童・生徒及び教員の皆様にも厚くお礼を申し上げます。

(1993.3.10受稿, 5.17受理)